

花火見物

—瀬戸内の島の花火大会—

短編

山中與隆

YAMAYUKA YOSHITAKA

Duo-Yamanka

花火見物

山中與隆

目次

花火見物

1

編者あとがき

71

花火見物

作 山中與隆

花火見物に行つた。瀬戸内海のかなり大きな島で、本土とは橋で繋がっている。我が家からは車で二時間少々。

私たち夫婦はこの島が気に入っていて、これまでに何度も行ったことがある。島の道路を四十キロウオークしたこともあるし、孫一家が東京から来たときには、島内の宿に一泊したりもした。ずっと前のことだが、今はもういない高齢の父を乗せて島を一周したこともあった。それ以外にドライブには何度も行っている。だからこの島のことにはある程度わかっているつもりだったが、ここで花火大会があるこ

とは知らなかった。しかも結構見応えのある花火なのだそうだ。教えてくれたのは、音楽好きの仲間が集まったパーティーで、

「花火を見るなら絶対に穴場だから騙されたつもりで行ってみんさい」と教えてくれた人がいたのである。Iちゃんという丸々とした快活な女性だ。

インターネットで調べると、今年の開催日、花火

の行なわれる場所、駐車場のことなどがわかった。その日は、午前中ちよつとした用事があるだけで午後からは空いていたので、私たちは行くことにした。

ところが、その日になってみると朝から雨だった。天気予報では、我が家のあたりの降水確率は終日八十から九十パーセントとよくない。ただ南に数十キロ離れた目的の島のある地域は、午前中は八十パー

セントだが午後は三十パーセントになっている。私
は一縷の望みを抱いて、午前中の用事を急いですま
せた。その用事の帰りには、薄日が差しして車の中が
暑くなっている。私は花火大会が実施されることを
信じて帰宅した。

妻は、雨は上がっているが相変わらず雲が多い空
を見て出かけるのを渋った。

「行くだけ行って見よう」

と言うと、

「雨が降り出して無かったらバカみたいじゃ」
などとやりとりしているうちに、雲の間から日が差
してきた。私はインターネットに出ていた花火大会
の実行委員会というところに電話をしてみた。

「やりますよ。駐車場も、小中学校解放なので充分
ありますからどうぞおいでください」
と元気な声が返ってきた。この電話と日差しのおか

げで行くことに決まった。

出かけてから三十分も走るとフロントガラスに水滴が掛かり始めた。

「やっぱり甘くないみたいだね」

私は多少降っても、一応現地までは行こうと思つていたので先手を打つつもりで探りを入れた。今にも「止めよう」

と妻が言い出さないかと思つたからだ。しかし妻は

予想に反して、

「行ってみて中止だったら帰ってくればいいだけじゃない。ドライブしたと思えばいいんだから」と言うではないか。出かけてしまつてからと、出かける前とでは考え方が違ふらしい。これで私は降ろうが降るまいが気にせず、に運転することが出来る。

橋が近づいてからも、橋を渡つて島に入つてからも特に車の渋滞はない。何十万人も集まる花火大会

とは違ふということだろうか。そのとき雨は落ちて
いなかつたし、空には晴れ間さえ見える。花火はあ
りそうだ。

家々の立ち並んだ狭い道路に入ると急に大勢の人
がゾロゾロと歩いて来るのに出くわした。どうやら
駐車場の方から来る人たちのようだ。いかにも花火
見物らしく浴衣姿の人が多し。私は徐行して人の群
れを縫うようにしながら、随所に立っている誘導員

の指示に従って進んだ。前を走る車も同様にしている。よくわからないが花火大会の駐車場に誘導されているのだろう。しばらく進むと、小学校、中学校を示す矢印があつた。それに従って右折すると小学校のグラウンドがあり、何人もの誘導員が赤ランプのピカピカ光る棒を持って車をさばいている。私もそれにしたがって小学校のグラウンドの中央辺りに、すでに駐車している車の隣に停めた。隣の車は、若い

人たちが四人くらい乗っていたが、エンジンをかけたまま車の中にとどまっている。まだ時間が早いから車のクーラーの中で時間つぶししているのだろう。私たちもしばらく車でCDでも聞こうかとも考えたが、折角遠くまで来たのだからこの辺りを歩いてみることにした。まだ小学校グラウンドの臨時駐車場は半分くらいしか埋まっていない。花火が七時半ころ始まるとするとまだ三時間以上ある。

私たちは、花火会場に向かう人の流れに乗って歩いた。日が照ってきいたので、雨に備えて持ってきた傘を日傘代わりに使った。数分歩いたらもう屋台が道の両側に並んだ場所に来た。浴衣姿の若い女性や、親に連れられてはしゃぐ子供、それに焼き鳥や焼きイカのいい匂いが雰囲気を盛り上げている。まだ昼間の明るさだが、もう屋台で何か買っている客もいるし、設営の最後の仕上げ作業をしている屋台もある。

る。私たちはこの花火は初めてだったので、何処で打ち上げられるのか、どの辺りが良い見物場所なのかまったくわからなかった。とりあえず行けるとこまで行ってみることにした。

行き止まりは芝生の公園になっていて、すでに公園の海岸側にはたくさんの人たちが敷物を広げて座り込んでいる。この辺りが見物場所らしい。芝生の真ん中あたりにはまだ誰もいなかったが、ここも雨

上がりとみえて芝生も地面も濡れている。私たちは敷物を持っていなかったので、いま来た方に戻って見た。漁船が碇泊している漁港沿いの堤防がちょうど腰掛ける高さになっていたので、そこで見ることにした。地面に座り込むよりもこの方が楽だ。すでに同じように堤防に陣取っている見物人もかなりいた。席は決めたが、花火が始まるまでにはまだ三時間近くある。

私たちが陣取った道の向かい側に、幼児を二人連れた若い家族が大きなシートを広げて、何だか食べるものを作っている。見たところ冷やしラーメンらしい。こんなところまで来て、こまめにいろいろな材料を混ぜ合わせている。ちよつとすました感じで、比較的ファッショナブルな服装のどちらかというと都会的な感じの若いお母さんだが、見かけによらず面倒くさがらずに材料を揃えて持ってきたようだ。

子供達も待ちかねているようにちよこんと縁石に腰掛けておとなしく待っている。出来上がると、よちよち歩きの下の子はお母さんに食べさせてもらい、上の子は自分で不器用に箸を使って食べ始めた。若いハンサムなお父さんはさつきまで子供達とシート周りの走り回って遊んでいたが、いまは子供達の面倒を見ているお母さんをよそに、自分だけどんどん食べている。お母さんは後から食べることになる

ようだ。

私と妻は交代で屋台に何か買いに行くことにした。妻が先に行つた。

その間にも続々と見物客がやって来る。私たちの前の広い道路は、車は通行止めになつていて、その舗道と車道を分ける縁石が端から順に見物客で埋まつていく。

道路の向こう側にはトイレがある。それは芝生の

公園の入り口に当たる場所で、公園の常設トイレと
思われる。仮設トイレもいくつか作られていること
がインターネットに書いてあったが、ここからは見
えない。公園のトイレには早くも列が出来ている。

トイレの入り口とは反対側、つまりトイレの裏側
にも何組かの見物客が場所を占めている。敷物に座
っている三人連れの家族の傍に、浴衣を着た若い女
の子が一人、しゃがんでいる。敷物の家族の一員で

はないようだ。一人だけでさつきから長い時間じつとしゃがんでいる。しばらくして見ると、女の子は携帯電話を、スマホと言うやつかもしれないが、かけている。待ち合わせの相手が来ていないのかもしれない。

十五分くらいしたら妻は紙コップに何本かの串焼きを入れて戻ってきた。

「先に食べてるよ」

と言う妻を残して、今度は私が買いに出かけた。屋台の前の道路に人は多いがまだ歩きにくいほどではない。私は牛肉の串二本、小玉のりんご飴二つ、フライドポテトを紙コップ一杯買った。全部で二千円。妻が、屋台を見たときから言っていたが、確かにどれも高めだ。

私はりんご飴の深い赤色が好きで、子供のころから祭りの屋台などで見るたびに欲しいと思ったもの

だ。しかし何故か私の親は一度も買ってくれたことがなかった。今は誰にも邪魔されずに自分の判断で買うことが出来る。

自分の席に戻るときには、出かけたときよりも人が増えていた。妻の姿も遠くからは人の陰で見えにくい。席に戻ると、妻は私が持っているりんご飴を見て案の定、

「口が真っ赤になるやつね」

と、やや批判的な調子で言った。別に言い訳をする必要もなかったが、

「子供のころから一度買って見たかったから」と言い訳をした。

先ずは牛串から食べることにした。タレと塩の二種類の塩の方から串に刺された五切れを妻と分け合つて食べた。柔らかくはなかったが美味しかった。続けて食べたタレは、少し柔らかくて、さらに美味し

かった。

右前方の縁石に陣取った四人家族の子供二人がふざけあっている。小さい方は女の子で三歳くらいだろうか。上は男の子で、保育園の年長組くらい。女の子はバットの形をしたゴム風船で男の子を追いかけて回して、頭を叩く遊びに夢中である。男の子もわざと追いつかせて叩かれるのを楽しんでいるみたいだ。二人はゲラゲラ笑いながら延々とこの遊びを続

けている。

私たちは牛串を食べ終わり、私は妻の一本残っていた鳥串から二、三切れもらって食べた。これもタレ味で美味しかった。それから二人でフライドポテトを平らげた。まだ夕食には早い時間だったが、かなり満腹になった。それから私たちは何となく気に掛かっていたりんご飴にとりかかった。堅くて歯が立たない。二人ともペロペロ舐めるだけだ。口は真

っ赤にならなかつた。しばらく舐めてからそのままビニール袋に戻して持つて帰ることにした。

私たちの左前の歩道に三人連れの家族がやって来た。小学生くらいの男の子と若い両親だ。彼らはよくあるビニールの敷物ではなく、草色の綺麗な模様の付いた座布団のようなものをその辺りに敷いた。そして直ぐに三人揃つて何処かに出かけて行つてしまつた。綺麗な敷物は適当に間隔を取つて敷かれた

まま取り残された。持ち物も少し置いてあつたが、盗られることなど心配していないようだ。

今度は私の直ぐ前の歩道に四人家族が来た。美男美女の若い両親と、小学校低学年くらいの男の子二人だ。子供達は早速おやつを食べようとしたが、お母さんが制止して、ウエットティッシュを配った。それはお父さんにも配られた。それからひとしきり彼らの食べごとが続いた。

七時が近づいて、

「あと三十分だ」

と思ったとき、私たちの右隣にいた、バイクの話ばかりしている若い男性二人組みが、

「八時十五分だよな」

と話すのが聞える。どうやら花火の開始は七時半ではないらしい。

直ぐ前の小学生の兄弟が枕のようなもので叩きあ

いを始めた。この子たちも長いことそれをやっていたが、一人が悲鳴を上げた。どこか痛いところに当たったのだらう。直ぐに母親が二人からその枕を取り上げた。斜め後ろから見てもこのお母さんは美人だ。

私は今日ここで二つの出会いを密かに期待している。一つはこの花火大会のことを勧めてくれたIち

やんが来ているかもしれないということ。もう一つはF先生に会えないだろうかということだ。

F先生は五十年近く前、私がここではないが、瀬戸内海の島の小学校に新卒として赴任したときに同僚だった人である。F先生は私の四、五年先輩で、同学年を受け持ったときに随分お世話になった。当時私は一生懸命努力したつもりだったが学級経営が上手くいかず悩んでいた。

私たちは三年生の素晴らしい学級を受け継いだ。

F先生は子供の心を捉えて素晴らしい集団を作っていった。それに引き換え私もとてもいい学級を受け継いだにもかかわらず酷く荒れた学級にしてしまったのだ。

F先生だけでなく校長先生初め全部で十数人だった先生方みんなに大変心配をかけた。

そのF先生の実家がこの島のはずだ。もしお元気

だつたら八十近くになつておられると思うが、万が一でも見物客に混じつていないかと思うのだ。もう今ではすれ違つてもお互いに気が付かないかもしれないが、お会いしたいものだ。

私はその島の学校に三年いたが、その後本土側の大規模校に移り四年間教職を務めた。しかし小学校教師に向かないことを悟つて、一般の会社に転職し、定年まで勤めた。そこでもたいした業績は上げなか

ったが、子供相手の仕事よりは向いていたかもしれない。

日が照っていたのは私たちが駐車場に着いたころのほんの一時で、そのあとは雲が広がって、今はすっかり厚い雲に覆われている。日が傾いたためもあって空は暗い。初め写真のフラッシュかと思ったが、よく観察すると稲光だ。嫌な感じになってきた。こ

れまで二時間以上待つて、さらに一時間待たなければならぬのに花火が始まる前に雨が降り出すのだろうか。私は、雷雨の中をゾロゾロ帰りを急ぐ人の群れを想像した。堤防に陣取っていた誰かが、

「雨になるな」

と言うのが聞える。

薄暗くなり始めたころ、花火大会と書かれた半纏を着た数名の男女が、会場周辺に立てられている笹

竹の提灯に灯を入れに回ってきた。一本の笹竹に十個くらいずつ提灯がぶら下げられている。会場に来たときからこの提灯は見えていたはずなのに、この作業が始まって初めて存在に気付いた。見回すと笹竹は会場周辺全体に万遍なく立てられている。半纏の人たちが一本ずつ笹竹を倒し、提灯を手の届く高さにして、その一つ一つにローソクを入れ、火を点けている。灯をつけ終わると再び笹竹を起こして元の

ように杭に紐で縛っていく。提灯の付いた笹竹を倒すとき、すでにそこら中に見物客がシートを広げて場所を取っているので、笹竹が倒されるところにいる人たちは場所を空けて作業に協力している。中には

「そっちの方向に倒せば場所が空いているのに」と文句の声も聞えてきたが、半纏の人たちはほとんど気にせずにとんどん作業を進めていく。一本一本

大変なことだと思つたが、見る見るうちに向こうの方まで進んでいった。薄暗くなり始めていたが、灯を入れて再び立てられた提灯は、まだ灯が入つてい
るのかどうかわからない。

突然子供の大泣きが聞えてきた。さつき風船のバツトでふざけあつていた上の男の子の声らしい。すでにその辺りも縁石だけでなく、車道上にもたくさんの人が陣取つている。浴衣を着た若い女性とその

ボーイフレンドといった二人連れが多い。若者たちの四、五人連れもあちこちにいる。もちろん浴衣でない若い女性も少なくないし、浴衣の男性も少しはいる。薄暗くなってきた中ではどの女性も綺麗だ。ミニスカートやホットパンツ姿も目を惹く。『夜目、遠目、傘の内』とはよく言ったものだ。

トイレの裏側の辺りも見物客が増えてだんだん歩くスペースが少なくなっている。トイレの表側に並

ぶ人の列は先ほどよりも長くなっている。もつと早い時間だったが、妻も一度トイレに行ったので聞くと、そこのトイレは、建物はそこそこの大ききさなのにトイレそのものは二つしかないそうだ。私も花火が始まる前に行っておこうと思っていたが、その話を聞いて諦めた。

一人ぼっちで誰かを待っていた浴衣の女の子の傍に若い男が並んで敷物に座っている。

背の高い外国人の男性と、背の高くない日本人女性のカップルが歩いて来た。男性は半ズボンにTシャツ姿でうちわを持っている。女性は浴衣姿だが、その浴衣が周囲の浴衣と違って大いに目を惹いた。赤、黄色、ベージュ色の一辺が二十センチくらいの四角い布を縫い合わせたようなデザインで、帯は空色である。その色の組み合わせが見事だ。カップルは、縁石の隙間を見つけて座った。

若い女性の浴衣姿はいいものだ。着ている人の顔の良し悪しも無関係ではないが、少なくとも洋服よりもスタイルの良し悪しはかなりカバーされる。実に日本人向きである。外国人の女性も日本に來ると着たくなるらしく、その姿を見ることもあるが、やはりハイウエストすぎる。この会場でも外国人女性を何人か見かけたが、浴衣姿はまだ見ていない。

私は着物より浴衣の方が好きだ。何となく堅苦し

さがある着物に比べて、浴衣は自由な感じがいい。浴衣の薄着感も色っぽい。やはり浴衣の女性は花火の華である。

私たちの左の方はバリケードで仕切ってあつて、その中は警備の警察官や花火師、それらの関係車両などの場所になっている。バリケードの一番観客側に工事現場でよく使われているバルーンライトが置いてあつて、係りの人が点灯の準備を始めた。バル

ーンの柱を伸ばしたりしていたが、わからないことがあるのか携帯電話で問い合わせている。

ちようどそのバルーンライトの直ぐ近くに早くから陣取っていた、かいがいしく働く奥さんの家族が、荷物だけ置いて一人もいなくなっている。

その間にも見物客は増え続けている。道路の真ん中に場所を占める人も出てきて、新たな見物客の通り道はだんだん狭くなる。私は食べたものの包み紙

などを捨てに行くことにした。トイレの裏側は芝生の公園の領域になっていて、公園への広い通路になっている。その通路のトイレの反対側にゴミ箱が作られている。その辺りに敷き詰められたシートを縫うようにして、ゴミ箱までたどり着いた。すでに燃えるゴミと書かれた箱はかなり上の方までいっぱいになっていた。

交通遮断されているエリアの奥の方では花火師と

思われる一群の動きが活発になっている。彼らはどうやら湾の入り口の突堤で打ち上げるようだ。その突堤のごく一部だけが私の所からも見える。

いつの間にか先ほど点けられた提灯が明るく見えるようになった。その光は、花のようにも見える。辺りが暗くなって急に現れたような感じだ。

バルーンライトが点灯された。発電機の音が喧しいかと思つたが、会場全体のざわめいた中では聞え

ないくらいだ。発電機のエンジンの排気ガスの匂いも私たちのところまでは流れてこない。

湾の対岸の建物の明かりが煌々と見える。これも急に現れたような感じだ。見回すと街の明かりも街灯の明かりもはつきりと浮き上がっている。それらが漁港の水面に映って揺れている。七時半だ。八時十五分開始とするとまだ四十五分ある。妻が、「カキ氷を買ってこようか」

と云うので私はミゾレを頼んだ。数分で妻は帰ってきた。

「歩くのが大変だった。ミゾレはなかった」と言つて、赤いイチゴシロップのかかった紙コップに山盛りのカキ氷を二つ持っている。特に暑いわけではなかつたがこれも美味しい。四十五分かけてゆつくり食べよう。

まだ、と云うよりさらに続々と見物客がやって来

る。車道の真ん中にも座るような場所は少なくなっている。なので、やって来た人たちは座る場所を探してキョロキョロ見回し、少しでも空いている所があるとシートを広げる。私たちは、広めに場所を取っていたので、荷物を纏めて少し詰めた。しかしここには最後まで誰も入ってこなかった。

四人連れの男女の若者がやってきて、道路の真ん中に陣取った。各自背中にぶら下げていた細長い袋

からキャンブ用の椅子を取り出すと、それを広げて丸く並べた。すぐに一人を残して三人は何処かに出かけた。

トイレの行列はさらに長くなっている。花火が終わるまで私は持ちこたえられるだろうか。少し心配になってきた。

芝生の公園の方ではさつきからちびっ子のダンスとか盆踊りとかアナウンスがあつたが、それらしい

音楽が流れてくる。稲光りは間隔を短くして盛んに光っているが、この辺りに近づいてくるけはいはなく、雷鳴も聞えない。

カキ氷はコップの下の方にたまった氷水を飲むようにして平らげた。その紙コップを捨てにもう一度ゴミ箱のところに行った。燃えるゴミ、ペットボトル、ビン、カンなどと書かれた四つの箱はどれもほぼ満タンである。私は紙コップを燃えるゴミのここ

ろに押し込んだ。そのあたりは敷物を踏まずに歩くのが難しいくらいになっていた。

何と言つても見物客は圧倒的に若い人が多い。もちろん若者以外も混じってはいるが、高齢者となると探さないと見つからないくらいだ。私たちがよく行く音楽会などで圧倒的に年寄りが多いのはまったく対照的だ。音楽会よりも花火見物の方がエネルギーを必要とするのだろうか。でも若い人が多いの

はいいことだ。

キャンプ椅子の四人組の席では宴会が始まっていた。といつても大声を出すわけでもなく、いでたちや髪型や座っている姿勢の割には静かな宴会である。その中の若い女性の一人がひっきりなしにタバコを吸っている。そう言えば、堤防組みの右の方の若い女性も、見るといつもタバコを吸っている。それに比べると男性の喫煙姿は気が付かないくらい少ない。

突然

「十、九、八、七・・・」

何処からともなくカウントダウンの声が起こり、たちまち大勢が唱和して

「ゼロ」

の瞬間、突堤の辺りから立て続けに花火が上がりました。このカウントダウンの正確さは驚くべきだった。

初めは低いところで開き、輪も小さかったが、だんだん高く大きくなり、一連の最後には最も高く、ほとんど私たちの真上で大輪が開いた。腹のそこに響く大音が周囲の山々にこだました。そして会場からは大きな拍手が沸き起こった。この拍手は花火師に届くのだろうか。花火が上がっているときも稲光はあつたが、もはや誰も気にしない。

トイレの行列は、同じように長く続いている。そ

して新たな観客の列も続いている。花火は、ひとしきり終わっても殆ど間隔をおかずに次のシリーズが始まる。さまざまな花火が上がり、水中花火かと思える半円に開くかなり大きなものもいくか混じっていた。

花火が始まって三十分位したころ、まさに花火の真っ最中で、むしろこれから佳境に入ると思われるときに何の動きかと思ったら、席を立つグループが

あつちにもこつちにも見られる。立って見るのかと思つたら、帰るのだ。早仕舞いの家族が立ち上がり始める少し前に、警備の警察官達が急ぎ足で出口の方に向かつて行つた。花火が無事終わりそうなので任務を終えたのかと思つたが、そうでないことがやがてわかる。

私たちの近くでも何組も後ろ髪を引かれるように打ちあがつた花火を振り返りながら帰っていくグル

ープがあつた。左の方の洒落た座布団の家族も早仕舞い組みだ。男の子が、

「あー、楽しかった」

と大きな声で言いながら帰って行つた。何だか自分を納得させるためのように見える。バルーンライトは花火が始まる前に消されていたが、その直ぐ近くのかいがいしい奥さんの家族も急ぐように帰って行つた。また私の直ぐ前の綺麗な奥さんの家族も早仕

舞いである。お父さんが子供二人の手を引いてさつさと歩いて行ったあと、お母さんが敷物を片付け、こまごました持ち物や、食べ物の空なども片付けて、後ろに置いてあつた二本の傘も忘れずに持つと、もう見えなくなっている三人の後を追つた。さらに、私たちより早くから堤防にいた左隣の年の多い三人家族も敷いていたブルーシートをたたんで家路に就いた。お父さんだろうか、長い時間、本当に長い時

間座っていたためか、歩道に下りてから何度も何度も屈伸運動をしてからゆっくりと歩いて行った。私たちの前の歩道は来たときのようになつた。

実はこのとき私は、帰りの渋滞のことはまったく頭に無かつた。

そして圧巻はファイナーレだつた。花火では白いと言つていいのかもしれないが、その白一色で無数の小菊のようなのが、連続的にかなり長い時間高く低

く上がり続けるやつだ。一、二分も続いた最後に最も高いところで白い大輪が開いて終わりとなつた。会場全体から大きな拍手と歓声が起こつた。

周りが空いてから帰ろうと思つたが、ゆつくりとした帰路につく人の流れが出来ていたので、私たちも帰り始めることにした。浴衣の女性の後ろ姿は色っぽい。どの屋台でも最後の売り込みに大声で客寄

せをしている。売れ残りをさばきたいのだ。そしてかなりの屋台に人がたかっている。道の縁に座り込んで焼きそばを食べているグループもある。

出口の交差点に差し掛かると交通整理の警察官が、てきぱきと人の流れをさばいていた。そのおかげで、駐車場の小学校までゆっくりとした群集の流れは混乱もなく続いた。私たちは小学校のグラウンドに入つたが、さらに先まで歩く人の流れもある。中学校や

そのほかの駐車場に車を置いているのだろう。やはり私たちはかなり早めに来たので最も近い駐車場に停めることが出来たようだ。

それからが大変だった。まず自分の車を出口に向かう車の列に入れてもらうのに一苦労する。親切に「どうぞ」

と言ってくれる車もあるが、それは少ない。なにしろまったく動かないような列が、やっと動きかけた

とき自分の前に他人の車を入れるには気持ちの余裕が要る。このようなとき我が家では、

「どうぞ」

と言われるまで割り込もうとしない私と、もつと強引に意思表示しないと永久に入れれないと言う妻の言い合いが起きる。もつとも、

「どうぞ」

と言ってくれるのを待つのも、なんだか物欲しそう

でいい気持ちのものではない。

まあ何とか駐車したところからは列に入れたが、次の列にはなかなか入れない。私はついにかんりの尿意をもよほしてきたので、すでに空いている場所に車を停めて、歩いて小便が出来そうなところを探した。当てもなく歩いていると駐在所に明るく電気が点いている。行ってみると、そこにはトイレを借りに来た人たちが何組かいた。何故か女子用が手間取

っている。男子用が先に空いた。私の番だったが、男子用にも便座があることがわかったので私の前で足踏みしながら待っている女性に先に行ってもらった。駐在所のトイレはとても綺麗に管理されていた。私は用をすませて、ゆっくりと駐車場に向かった。トイレのために十五分くらいは経過しただろうから、車はかなり掃けただろうと思っただが、それほどでもなかった。

また列に入れてもらおう苦勞をしながら何とか一般道路に出た。そこものろのろで、中学校に作られた臨時駐車場からの車と合流するところでも手間取った。しかし誘導員がいたので気苦勞はせずすんだ。まもなく島の南西部を一周する県道に出ると、これまでの渋滞が嘘のようにすいすい走った。六十キロ近くで走っていても、カーブの多い海岸線の道路では前の車が見えなくなる。しばらく快走したが、本

土への橋の方向指示板にしたがって右折した途端に
ぴたりと停まった。前の方の車が何台かユーターン
していま来た方に戻っていった。さつき右折したと
ころまで戻って、直進するつもりらしい。カーナビ
で調べると、直進すると少し遠回りだが先の方で合
流することになっている。彼らは先回りを狙うらし
い。我が家でも、ユーターンした方がいいかどうか
ちよつとした議論があつたが、結局私たちはこのま

ま進むことにした。

酷い渋滞だった。それでも停まったり動いたりしながらようやく合流地点らしいところが見えてきた。やっぱり向こうものろのろ動いている。

花火が終わったのは九時十分前、小学校の駐車場を出たのは九時半くらいだろうか。もう直ぐ合流地点だがすでに十一時である。合流地点に信号はなかったがみな礼儀正しく交互進入を守っていたので比

較的スムーズであつた。

合流してからも同じような渋滞が続いた。それでも少しずつは橋に近づいている。

十一時四十五分ころ橋の信号にたどり着いた。橋には左折して入る。信号では警察官だと思ふが、信号機の柱の機械を開いて時間調整をしているらしい。そのためかあつさりと橋に入れたし、予想に反して橋を下りてからの本土側の国道には何の支障もなく

入れた。

結局、この島としては異常に多い車の殆どすべてが島内の長い一本道を通ることによる渋滞だったのだらう。行くときは二時間少々だった道のりを四時間かかって帰宅した。

島での渋滞の途中から少し雨が降り出していたが、本土に入ってからはかなり大降りになった。

「こんな日に花火が最後まで見られたなんて奇跡的

幸運だね。それにあの素晴らしいファイナーレが見られたのだから、あれだけでも行ってよかったよね」といふのが、私たち二人の、この日の総括だった。

(了)

編者あとがき

著しくIT技術の発達した今日、かつて発表の機会に恵まれなかった無名アマチュア作家に大きなチャンスが到来しました。昨年末のAmazonのペーパーバック進出はさらに力強い追い風となっています。

故山中與隆は、定年後すぐに退職し、アマチュア

としてチェロを弾いて室内楽を好きなだけ楽しみな
がら第二の人生を過ごしておりましたが、それと同
時に、作家になることを目指して文筆を続けると宣
言し、毎年のように懸賞に応募していたようです。
それは近年まで続けられていたことがパソコンの中
身から分かりました。傍におります妻の私は、とう
に文筆を止めてしまっていると思っておりますの
で、それを知って愕然としました。

ここに、山中與隆が書き残しましたものを順次発表していこうと決心しました。なんらかのきっかけで本作品をお手にとって頂けたご縁を嬉しく思います。今後発表する作品にもご期待下さい。

またブログ ([URL:https://www.duoyamanka.com](https://www.duoyamanka.com))
への投稿の形でも発表していきたいと考えております

すので、あたたかく見守っていただければ幸いです。

二〇二二年四月

山中伶子

※1 山中與隆（やまなかともたか）の名前についで

與隆の「與」の字は「与」の旧漢字です。従って、入力時に「よ」で変換をかけると、下位ではありませんが、表示されません。

著者紹介

山中與隆（やまなかともたか）

一九三九年～二〇二一年

「名古屋生まれ、広島大学卒。小学校の教員暦七年、その後一般のサラリーマンを三〇数年。いまはリタイアして悠々自適の生活を享受中。大学時代に始め

た弦楽器（初めはヴィオラ、その後チェロ）を今も
続けている一方、小説や随筆の執筆にも力を入れた
いと思つています。

書くものとしては文学的なものから推理もの、歴
史もの、恋愛もの、ファンタジー、社会派的なもの
などジャンルを選びませんが、常にベースには何ら
かの形で音楽が絡んだものにしたたいと考えています。
ライフワークとしたい目標は、音楽を前面に出し

たもので読者の方々に小説としての読み応えと、そこに登場する音楽を是非聴きたいと思ってもらえるような、しかも私の著述によつてその物語にも音楽にも感動してもらえらるような作品を完成させたいと思つています。」

著者プロフィール(二〇一〇年五月)より

今後の出版予定作品

今後は、既刊の電子書籍のペーパーバック版を出版の予定です。

既刊作品

|| 電子書籍 ||

『都志見往来日記』 異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

蒸発の衝動

インテルメッツォ

爆発

妻が消えた

既刊の短編

アマールスを聞く男

オセロー

テンペスト

定年の晩

魂の三重奏

ロシアンルーレット

ささゆり

才能移転

ある三文作家が見たもの

けんか

袖ふれあうも

ミスターフエイト

峠を越えて嫁入りした女

花火見物

ある小学校教師の敗北

三坂峠 二話

第一話 《お蓮・勘兵衛 悲恋の墓》

第二話 《緑のトンネルで》

阿弥陀山

ゴーシユの華麗なる転身

ある男の臨終

野の寂しさ

四重奏

親も子も老いて

わしや、ただの山ザルじや

リヨウコからの電話

カルテットの風景

「オセロ」手紙版

出来る間に、出来るだけ

なぜ？

紀行文

広島百山と吉和冠山登山

ひとり、山を歩く

短編シリーズ String Fiction Series

1 弦楽四重奏団 a

2 弦楽四重奏団 b

3 親和力

- 4 トリオ・ソナタ
- 5 不協和音
- 6 解散
- 7 音楽のある生活
- 8 ビオラを弾く生活
- 9 疑問
- 10 生きがい
- 11 激情

12 カルテット

最終三作品

裸の王様は何処へ行く

むかし俺がクマだったころ

ある兵士の物語

Ⅱ既刊のペーパーバックⅡ

『都志見往来日記』異聞

コンサートは開かれた

さまよえる視察団

短編集テンペスト他

短編集2―ある三文作家がみたもの他

短篇集3―ミスターフェイトほか

花火見物

2022年8月30日初版発行

著者：山中與隆

編集：山中伶子

表紙素材元：

www.photo-ac.com

・タイトル：打ち上げ花火 夏の風物詩

作者：KKフォトさん

写真のID：24456301M

www.silhouette-ac.com

・タイトル：花火大会観客シルエット

作者：歩夢さん

イラストのID：1078959

・タイトル：浴衣男女シルエット

作者：デデムシさん

イラストのID：2660630

©Tomotaka Yamanaka 2022

<https://www.duoyamanka.com>
